

イルカが島にやってきた！



松井歩助教

突然イルカが棲みついたら？
2001年、石川県の能登島の海に、突然2頭のミンナハンドウ

「空間でみる自然と人間社会」についての研究です。
世の中に、理系（自然）と文系（社会）を明確に区別できるものはいくつあるでしょうか。学校の教科は分かれています。現実の社会課題はすべてつながっています。「自然環境」と「人間社会」

人々との共存を探る

探究心旺盛な小中高生の皆さんに向けて、弘前大学の先生たちのユニークな研究を紹介

のように、一見別々に見えるものでも、実は同じ空間の中でお互いに影響し合っているの



((44))



能登島の野生イルカ観光

イルカが棲みつつき、これをきっかけに、地元漁師たちは手探りでドルフィンウォッチングやドルフィンスイムなど、新しい観光業を始めたのです。専門家とも協力して、イルカに影響を与えない漁業のルールや組織を作り、集落の中で合意し

て事業は進んでいきましたが、だんだんと自然環境と人間の間に「ズレ」が生じてきました。
イルカは野生動物であるため、人間の思い通りには動きません。やがてイルカは繁殖し、行動範囲が広がってルールを決めていな

他の集落にまで現れるようになる。住民からは「観光船が邪魔だ」「イルカが増えて漁がしにくい」といった不満の声が上がりました。
松井先生は、ももとの慣習やルールが存在する漁村に、野生動物という新しい要素が飛び込んできたことで、人間社会がどう揺れ動き、どのようにルールを作り替えて共存を探るため、その試行錯誤の過程を記録しました。
複雑なものを「複雑なもの」として考える能登島のイルカのみならず、野生動物は常に動き回り、状況は変化し続けます。一方で、行政の区分や法律、産業の仕組みは場所や役割が固定されがちで、一度決めると簡単には変えられません。このズレこそが、多くの環境問題の根底にある課題です。
「イルカを守る」とい



イラスト・弘前大学大学院地学研究所 松井歩助教
共創科学分が関心のあることだからこそ、いろんな角

いことは良いことのように聞こえますが、それによって生じるトラブルも存在します。つまり、どちらか一方の視点だけに立っていても、課題が覆い隠されてしまうことがあるのです。通常、動物の研究なら生態のみ、観光の研究なら経済のみを見がちです。しかし能登島では、野生のイルカが棲みついたことで、「イルカの動きが変わると、漁師の仕事が変わる」というさまたま変化が起ったのです。社会問題を考える際には、専門分野にとらわれず、複雑なものを「複雑なもの」として考える必要があります。



また、自分が関心のあることをやるうとすれば、自分の考えや気持ちを引張られたい。弘前大学大学院地学研究所 松井歩助教
分が関心のあることだからこそ、いろんな角

私の研究も、漁師さんの船に乗せてもらったり、話を聞いたりすることから始まりです。どちらか一方だけどうまわいくものではないので、その行ったり来たりを通して、地域のことを深く知ってもらえたらと思います。

第44回の先生 松井歩助教
【人文社会科学部/社会地理学研究室】

度から見られるようになってほしいなと思います。
楽しいこともつらいことももちろんありますが、一緒に頑張りたい！

※この画像は、当該ページに限り陸奥新報の記事利用を許諾したものです。

転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。 令和8年2月23日 陸奥新報掲載